歪

宇ノ鹿　すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歪

【Ｎコード】
Ｎ６８１６Ｚ

【作者名】
宇ノ鹿　すい

【あらすじ】
あああああああああああああ。

序説

〈序説1〉

我ここにありと主張する幽体が、天にて輪を組み上げて時計回りをする夕暮れ時。奏でられるのは恐々とするのに足元から伸び上がってくる恍惚。そういう音色が、崩壊の夕焼けでもある世界で風音と混ざり合い、しかし溶け合うことはせず、幾重にも音階が積み重なっていく。

はぐれてしまわぬように見えぬ糸を薬指に巻いている人間が、大きく舌と白い歯を見せる呆然ぶりで、奏でられる崩壊の音色の夕焼け、朱色に、自らも混ざりはするが、やはり溶解はしない。

人はこれを複雑性と紡ぐ？混沌と？それとも終末と？彼にはわからぬ。いや、彼女かもしれない。人間でしかなくなった溶けない、混ざり込んでいる呆然は、天にて時計の針のように右回転をして、手を繋ぎ合って輪となり破滅を伝える顔の無い天使の集団を、ただ眺め見ることしか出来ず、感情の昂ぶりが音色に合わせて雫となりて荒地にぽつりと落ちることには、意識を傾けない。傾けることができないのだ。

破滅は人間の感情にある種の救いらしき気配を纏う、やすらぎとか奮えを携えさせて、涙粒を落とすことにさえ神経をわずらわせぬのだから、ひたすらに人間は視る視る視る視る視る視る、輪を組み立てし顔の無い天使によってもたらされる破滅を。

終末らしき夕焼けが世界を染色する中で、光景と、演奏と、昂ぶりと、風と、景色。朱の景色。いや、それら全てが混ざり合うことでそれ自体が演奏のように。或いは額縁に納められる込められし精魂のように、何度も構築されなおすより強固たるを目指す長城のように。

芸術のごとくありし瞬間にて、奏でられることはいまだつづいて

いて、夢のようだと人間が現実味を持たず、手を打ち鳴らす。ぱちっ、ぱち。空しく……演奏を……。

自然と発生した拍手、そのぱちっ、の音を自らの耳で聞くその彼は、ハッと目覚めるように己の両手を見下ろす。思考する。自らの手を鳴らすことで共鳴を試みようとした自らは、浮遊感のせいで足の爪先が浮き立っていて、釣り糸で背骨を引き上げられ奈落に墜落させられるかのような、大事が起きる予感に伴う、ある種の絶望と、しかしそれに伴う幸福の両方を感じ取っていて、とても不安定な様子だ、と言葉には表せなかったが、そのように思考した彼の脳髄。は、間もなく溶け始めている。ドロドロ、ではなくサラサラと乾燥した粒のように洗い流されて川の水滴となるような溶解。ぱちっ、ぱち。その音が焚き火の時に爆ぜるものだと思えるようになっていく、過程、夕焼けと焚き火の炎が視界の中でダブって重なるのを、彼は確かに視た。

そして同一化していく。夕焼けも焚き火も自らも川も枯渇した水の溜まりも。分離することで世界を営んでいた様々な物質や要素らしきが、ひとつのこらず一つと化する。彼には貧乏から脱するという目標があって、そのために一心不乱で頑張ってきたが、もう『彼』は無くなっている。顔の無い天使が滅亡を奏でるのに、のせられて。

再生がされるはずの仮の滅亡であったはずなのに、命の根幹であるものが崩れ落ちてしまったことで本当の人にとっての滅亡が訪れようとしていた。その事態を察知した人間だけが対処をし、鈍感であったものは皆、本当の溶解を平然と受け入れていく。それが終焉だとは知らず。

夕焼けがやがて沈んだ頃。顔の無い天使たちは、のっぺらぼうの顔を赤、青、緑、白、オレンジ、黄の六色を点滅させたまま、人々を溶かすための時計回りを止めない。天使たちは、情け容赦などしない。ただひたすらに、回る。くるくる、くるくる。

〈終末〉を主題とした演奏は、永久に続くかのように、終わらない。

破壊する対象である人間を、全て壊し終えるまで。
それが顔の無い天使の役割だった。再生があるからこその、役割だった。
でも湖はこの時、すでに枯渇している。命を再生させる六つの湖は干からびて、数多くの繁栄をこの世に表出させていたというのに、もはやその力を人間の手によって切り取られてしまった。そのせいで湖は枯渇し、これによって混沌が開始され、夕焼けが落ちる頃には人間の半数以上が溶けるのを既に終えていた。再生されるものだと誤解したまま、破壊され、溶け、た。

〈序説2〉

――やめるんだ。やめるんだ、やめるんだ。
その世界は湖からの再生と、構築と破壊から成り立っているようなもので、その根幹が失われれば混沌が生じるのは当然だ。顔の無い天使が破壊を行い、腑抜けた悪魔が人間の構築を手伝う。湖から誕生する顔の無い天使と腑抜けた悪魔、そして繁栄のための道具が別世界より湖より浮かび上がり、人々の生きていく糧となり、時には争いに利用される道具ともなる。
だが湖が命の大樹の破壊により、枯渇。六つあった湖はことごとく失われて、また腑抜けた悪魔たちもほぼ全滅することになった。顔の無い天使は腑抜けた悪魔を、殴打によって、なぶり殺しにする。数で圧倒的に多い顔の無い天使は、一人の腑抜けた悪魔を六匹で取り囲み、私刑（リンチ）、後に腑抜けた悪魔が顔につけている仮面を剥ぎ取って、露出した顔面も足踏みによってぐちゃぐちゃにしてしまうので……。
――や、やめるんだぐぇあ……あ……
再生と破壊が八十年周期で繰り返される、世界（ルービックキューブ）。幾多の人を召喚

し、顔の無い天使によって消され、新たな人や建物がまた造られたり、湖より呼び起こされる。それが常識として存していた太陽と月の回転する球体の世にて、人だけでなく多くの生物にとって影響を与える変化。

その原因は人間によって引き起こされ、そして人間にもっとも被害が向うと言ってもよろしいことを考えれば、実に人間という種が自虐的な行為をしたのだと、他の知能を持つ生物からすれば思う所であろうが、そういった知能を持った生物がこの時には腑抜けた悪魔程度しかおらず、その腑抜けた悪魔も、六色に点滅するのっぺらぼうに囲まれて、六対一、と言った情勢が目立つ中、踏み潰され、わずかに固形が残る吐瀉物のように陥る。

夕焼けという西の地平線にかかる太陽に照らされ、赤く染まっていた夕焼け雲も、いまや暗闇が世界を覆ったことによって暗雲と化し、まるで地表全体が釣り糸で引っ張り上げられて太陽が見えなくなってしまったかのような錯覚を起こすような、呑気な花が怯えるあまりに花びらを茶色にしてしまい枯れ落ち、腐植土へ混じるがごとく。

つまり全てが釣り上がっていく。世が転換する。地盤を揺るがすがごとくの強靭な釣り糸によって浮かび上がらされて不安定にぐらぐら。海から陸に上げられる魚はぴくぴくと跳ね上がることしか出来ないように、釣り上げられた世の人々は溺れるようにして手探りで、火傷するような危うさで、花のように枯れ落ちるのかもしれない。勿論、腐埴土は作物を育てることができる良い土壌かもしれぬ。しかし作物をそもそも作ろうとする者がいなければ……腐植土を腐植土と呼ぶ者すらいなければ、良い土壌も悪い土壌も、無い。

釣り上げられてぐらぐらしているのに、夕焼けは沈んでいて、終末を奏でる落日の陽。暗雲ばかりが瘴気のごとく立ち込むようになり、いや事実、瘴気が漂い始めたのである。その瘴気が世界全体（ルービックキューブ）の風景を比較的以前より禍々しく、まるで童話にて描かれる魔界のような様相へと堕としていく。

賢さを見せて即座の死は免れた希少の人々は、ぐらぐらと揺らされ沈まされ空気さえ大きく吸い込めないことに嘆く。「腑抜けた悪魔よっ」、と叫ぶ、いやそれは咆哮……切実な涙声を枯らすまで叫び瘴気を万遍なく体内に吸収した者もいた。だが腑抜けた悪魔はもうその数を0としているが故に、天の国にいる彼らには咆哮も届くかもしれないが、人が生きるこの魔界にはもはや悪魔はいない。のっぺらぼうの顔を赤、青、緑、白、オレンジ、黄、に光らせ、時計回りを続ける天使たちだけが夜空にいる。腑抜けた悪魔は無念さを抱えたまま、既に滅亡している。

無念さは怨念へと落ち込んでいて、実は世に突如として垂れ流され始めた瘴気こそが、腑抜けた悪魔たちの無念さが人に害を為す形となって生じた、怨念である。彼らの怨念が世界を魔界（ルービックキューブ）に仕立て上げ、毒々しいまでの景観と、人間にとって住みづらい環境を発生させたのである。湖を枯渇させた事に対する怒りが、怨念として……。

このように世は人間にとってより混沌と化していく。

顔の無い天使は遅いことに、時計回りを終えた頃に、湖の枯渇に気がつくが、全てはもう歪み尽くし、ほぼ全滅したと言っても良い惨状である。いや、むしろこれからであった、混沌が深まるのは。顔の無い天使たちが破壊を行うのは、再生が前提にあるからこそであり、天使とて破壊する対象がいなくなってしまってはその生態の性質的に困ってしまうのである。

つまり、天使は破壊を行わなければ、足腰などの関節や、その全身を流れる血液などを、固まらせてしまう。そういう破壊をしなければ済まない性質を持っている。故に再生が為されなければ、天使たちは自滅へと向っていく他無い。天使たちが時計回りをやめる頃、全ては不安定にぐらぐらと揺らぐのを既に終えていて、揺れたその多くは絶滅したか、瘴気漂う空気に適応しかろうじて生き延びたか、のどちらか。

顔の無い天使たちにも、絶滅か、適応か、その二択が突きつけられる。湖の枯渇が原因で狂い始めた歯車が、皮肉にも生物たちの姿

形を、進化のごとく急速的に変化させようとするのだ。絶滅の可能性という危惧を加えることで。
そして湖を枯渇させた元凶である人間たちもまた、その二択を当然に突きつけられたわけであり……。
釣り上がった世界に、まだ月は昇り上がる。かつてこの世にて繁栄の三日月だとか、ウロボロスの満月だとか言って神聖化されてもいた、仄かな月光零す天体。
昇り上がる。

〈序説3〉

雷鳴が轟きを発し、地の汚泥を抉る。雷の青紫色をした閃光が走る間はわずかであり、音がゴロロと鬱蒼としている暗ぁい世に走るが、誰もその轟きに怯えたりはしない。突如として毒々しい色の雨が降り注いできたり、身体が吹き飛ばされないように堪えるしかない突風が予期無しに吹いたり、真っ赤な色の雪がしんしんと降り注いできたりしても、誰も驚きはしない。
瘴気漂う世界にて歪（イビツ）という、瘴気が凝固して怪物になったモノさえ誕生していた。そういう魔界であるから、悪天候などでは、その世に生きている人間は動揺しないようになった。慣れ、ということだろう。
幾度、太陽と月が巡っただろうか。日々数えてきた者はさすがにいないが、脳を利用することでその回数を認識することの出来る知性を携えた生物は瘴気漂う世界にて、いまだ存在していた。そう、人間は絶滅せず、生き延びたのである。『あれから』と言って人々は、数百年以上前の『終末』を語る。知ったように語る。経験した者など数百年という年月を考えれば一人もいないだろうに。
……が、何事にも例外というのはあり。数百年前から生きていて、その『終末』を実際に肌で、眼で、耳で、鼻で舌で経験した者、実

はいて、いまだ生きていたりもする。
事前に終末が起きると察知していた者が老いたまま、数百年呼吸と心臓の鼓動をやめずに存していたりする。それはある占い師の老婆であり、『終末』時にわずかに生き延びた人間たちの、唯一の生き残りでもある。
『終末』を越えて生き延びた希少なる少数は、子孫を生み、瘴気と戦い、怪物と戦い、飢餓と戦い、災害と戦い、そして、死んでいった。
薄い布の上で両手を組んで眼を閉じ亡くなった者もいれば、ばらばらに肉片になって死んだ者もあった。瘴気に侵されて苦しみながら、死んだ者もあった。痛い痛い痛いと叫びながら、やがて事切れた者も、三日三晩、腹の虫が鳴るのに苦しめられて命絶やした者も……。
ただそういった先人たちの生き死を通して、虫の息と呼べる滅亡の危機に瀕した人類たちは魔界にて再起。再興。数百年の間で、瘴気の中でも生きていくための手法を編み出し、湖の枯渇の時に同時に失われてしまったはずの”魔法”の技術もわずかだが掘り起こし、また新たな繁栄のための術、”祈祷術”も生み出した。魔法は万人がわずかに生活を利便にするために用いれる術であり、祈祷術は一部の生まれつき才能がある者だけが利用できる、人の革新を促すがごとくに優れた術である。ただ本当に一部の者にしか宿らない力のため、人々は魔法を主なる力として生活をこなす訳だが、祈祷術と魔法ではそのエネルギー量と利便性には大きな差がある。一人の祈祷術のエネルギー量は、一万人の魔法の総量に勝るというのだから、祈祷術の才を持つ者がいかに貴重がられるか、神聖化されるものであるか、想像は簡単につくものである。
祈祷術によって人は都市に瘴気、もしくは歪の侵入を防ぐ。半円状の膜を張ることで都市内に障害や悪性の空気が入り込むことを、妨げるのだ。これは祈祷術の利用例の一例に過ぎない。さまざまな場面で、祈祷術の才を持つ者は優遇され、神聖視され、祈祷術は実

際に人の生活を多くの場面で救う。
半円状(ドーム)の空間で住まう人々は瘴気や歪(イビツ)などの障害の無い、毒々しい魔草や魔花が咲くような作物も育たぬという悪環境の地を避け、比較的良環境の、清潔な、湖が枯渇し腑抜けた悪魔が怨念を撒き散らす以前の空気の中で住まう。
人々はそういった場所で作物を育て、また、家を建築し、下水道や道路を整え、家畜を育てる。人のために、人が住みやすくなるために、新たな形態の社会は創られ進歩していく。滅びる前にあった知恵を残っていた本などの資料、生き残った人同士の知識などによって再生させる。魔法もそういった手法によって再生された技術だ（昔と比べると申し訳程度のエネルギーしかないが）。
現在、半円状(ドーム)内の都市は、世に六つ形作られている。
かつてこの世界に、湖(ルービックキューブ)は六つあった。そして人々はその六つの湖を中心として営みを続けてきた。その営みを模倣するかのように、人々は再び六つに別れて都市を形成し、その六つがそれぞれ時に協力し、時に争うことを繰返してきた。伴って、瘴気や歪(イビツ)を対人兵器にしようとする都市もあり、機械を積極的に製作し他の都市と差をつけようとする都市もある訳だが、歴史は繰り返すとでも言うのだろう。そういった人間たちの営み方は、滅亡以前と何ら変わらない代物である。人間は進化を行うまでもなく、湖の枯渇という大変動を乗り越えてみせて再び発展するのである。何百年という期間を使って、大混沌に陥った人間たちは”六つの都市”という形態を取り戻したということだ。半円状(ドーム)内でしか碌に生活できないという悪い点はあるが、その代わりということではないだろうが祈祷(レイ)術という新たな力も得た。
湖の枯渇と、腑抜けた悪魔の放出する怨み。そしていまだ時折出現しては人を破壊する顔の無い天使。そして突如として発生する天災。これら様々な障害によって生活の上での不満も人々には多々あったが、その生命力、つまり欲望でもってして、困難を乗り越えてきた。そして近年、人間という種は長年の連なりと積み重ねによっ

て、半円状（ドーム）の中で平穏を手にしたのである。
だが百年以上生き続ける不死の占い師の一声によって、月の明かりを遮る暗雲がまたも立ち込める。
「巨大なる生物の侵攻が、私たちの積み上げし数百年を、押し潰すであろう」
彼女の予言は、悪いものに限ってよく当たる。
災いをわざわざ呼ぶ占い師、と揶揄されてしまう程に悪い予言に限って当ててしまう老婆の占い師。彼女が言ったのだ。
巨大なる生物の侵攻が、積み上げてきたものをぶち壊してしまう、と。

序説　直前（前書き）

後で書き加えます。まだ途中ですが、気分転換のために投稿。

序説　直前

〈序説　直前〉

腑抜けた悪魔が瘴気を噴き出した時、そこにはどういう思いの猛りがあったであろうか。もしくは瘴気が歪（イビツ）という怪物に陥るのは、腑抜けた悪魔の怨念の為せる技だとしたら、人間の犯した罪は腑抜けた悪魔にとっては死刑に値する程の代物ということか。怨嗟の深さが、牙が皮膚から入り込む時に毒を筋肉や神経に仕込む度合いも強めるとすれば、その傷口から猛毒が生じて人間の全身は腐敗するであろう。恨みが復讐を呼び、世界に腐敗をもたらす。

まず知性ある生物が真っ先に腐らせるのは身体ではなく、心である。

そもそも身体は死ぬまで腐るものではないだろうが、心は生まれてから数年で腐ってしまうこともままある。勿論生きている間に腐るのだし、人間は脱皮を日々行っているのだから再生はされるであろうが、死んだ物の心が腐敗したのならば脱皮をするわけにもいかないだろう。

故に、瘴気は消えないということだろうか。腑抜けた悪魔の死んだ後に発された怨念が、世に蔓延してしまったから、脱皮が行われないのだとすれば。

怨念よどうか治まりたまえ、と多くの人々は請うて来ただろうが、世の中に毒々しい気配は蔓延したままで、禍々しい紫色をしている。祈祷者がいくら祈りを捧げても、その怨念は浄化されることはなく空気を濁らせたまま。非常に有害で、人間が何の対策もなくドームから出てしまえば場合によっては即死、まぬがれても重大な病を背負うことにはなる。心身ともに腐るのだ。腐ってしまうと、もうイ

キテイラレナイのだ。
が、人とて無策ではない。有害たる相手にはそれ相応の手段を講じ、撃退もしくは滅殺、あわよくば共存、するのが知性ある人間達の欲求が為す技というもの。障害は取り除く、と。そのために脳を使い、工夫によって苦難を乗り越えることを欲求の元こなしてみせる。人の営み。
そして六つの都市に別れ住まう人々。都市の名はそれぞれ、セキドウ、セイラン、リョクチ、トウカ、ハクロ、コンゴウ。上から順に、赤、青、緑、燈、白、金の色を象徴とする国々であり、彼らは離れた位置にそれぞれ住んでいるが、祈祷術を利用している”祈像”と言ういわば通信機のようなモノを使用することで、連絡を取り合い外交している。祈像は同時に数十人以上で連絡を取り合える上に、それぞれの全身を一つの広域空間に投影してくれるので非常に便利な連絡手段とされており、都市間での首脳同士の会議も、瘴気が屯する外界に出ることもなく安全な場所で行えるのである。祈祷術のおかげ。そして占い師の老婆は、祈像による広域空間にて六カ国の首脳たちに要求を告げる。
「今すぐに全都市の妊婦を私の目前に連れて来い。健康であるか不健康であるかなどは一切問わない。とにかく妊娠している女を、今すぐに私の目視できる位置に引っ張り出してくるのだ。各都市が総力を挙げてただちに取り組め。さもなくば、オオイナルモノに潰されるぞ」
六カ国の首脳たち全員の頭上に、『？』、が浮かび上がったのは言うまでもない。だがしかし、老婆の凶を占う言ノ葉に対する信用が高い為に、老婆の要求を拒否するような頭は、一人もいないまま。広域空間での都市間会議は終わりの鐘を鳴らし、カーン、カーン、と打ち鳴らされるに伴って彼らはその場所より立ち去り、即座に総力を挙げて妊婦たちを集め出す。
老婆からの予期無しに発された大音声。何が起きるのか想像もつかぬまま発されたキーワードは『妊婦』。過去幾ばくも争いを絶や

さなかった六カ国の首脳は、しかしこの時は一丸となって妊婦集めという指令に従順し、オオイナルモノとは何奴なのか、と想像し背筋を震わせて戦慄する者もいれば、全ての妊婦を集めてその腹の子を殺すつもりじゃあるまいなと悪い方を勘繰っている者もいた。赤子全てを生贄に捧げて天災を免れるという手法が取られるのではないか、と不安なのだろう。

占い師の老婆だけが、赤子たちやがどのように扱われるかを知っている。その白髪の、耳毛が床下まで届くほどに伸ばしているシミだらけの老婆。シワだらけの老婆。彼女だけが、妊婦や赤子たちがどのように扱われるのか、胸内で知っている。彼女が突然提案したことだから、彼女しか知らない。彼女が妊婦をどうするつもりなのか答えていれば、周囲は少なくとも不安を感じたりはしなかっただろう。だが時が性急だったから語れなかったのかもしれない。語らなかったのではなく、語る時間さえも勿体無かったのかもしれない。老婆は耳毛を垂らしたまま、ただれた唇を塞いでいるから、老婆の考えは誰にもわからない。また同時にわかる必要が、ない。彼女が問題を解決する手段を理解しているのならば、他の者がそれを知る必要はないということだ。他の者の力を老婆が必要とする時が訪れれば、老婆は自然と唇を開くのだから。

そしてハクロに三十五万人の妊婦が集まったのは、わずか七日後のことである。七回太陽と月が回る間に六カ国全ての妊婦が、ハクロの大広場、大通り、また裏通りにも、破裂してしまいそうなお腹を抱えて集まってみせたのである。いつ危うい陣痛に襲われるかわかったものじゃない様子の人も当然いるわけであり、実際、血を垂らしてしまっているような容態となった妊婦も発生し、ハクロ都市内は、バナナの形をしたＵＦＯが突如として夜空から降臨する、とでも言うかのような厳粛な空気、何とも言いがたい重苦しい空気、が蔓延してしまっていた。老婆が突如、言葉を発してからわずか七日で集合させられるという強行によって、妊婦たちは疲れ切っていて、顔色も悪くて倒れないのが不思議なくらい。そう、彼女らは一

人も倒れてはいない。魔法の力、祈祷術の力、で守られているからである。そういったサポートはされているのだが、それでも妊婦たちは疲労を隠せない。当然であろう、心因的な部分もあるに違いない。

ただ集まれというだけで理由も聞かされていないのだ。『処刑します』と言われる可能性だって零じゃない。妊婦が三十万人一箇所に集められるという事自体が異様なのだから、『処刑します』という異常な宣言がされることは想像上、不安を感じやすい妊婦ならば特に、思えてしまうことだ。ただ祈祷術の安らぎがそういった部分の補助は欠かさない。それでも空気はバナナの形をしたＵＦＯが突如として夜空から降臨する、とでも言うような厳粛を抱えているのは、不安というものは紛らわしても、再度、纏いつくものであるからだろう。

だがその重苦しさがある瞬間にて止まる。ピタッと停止したように。何かが起きる予兆。そういう雰囲気。一時間ほど続いていた重厚は小粒のように小さくなっていき、代わりに騒々しさが大通りや広場を駆け抜ける。少し高めの、妊婦たちの民声。

お腹とお腹が擦りあってしまう程、場合によっては将棋倒しで全滅もありえてしまうのではないかと冷や汗を掻いてしまうほどに狭まっている熱の籠った女性の密集地帯。彼女らは顔を上げて天を仰ぐような姿勢となった。

彼女らが眺めた先にあるのは青白い光。かすかに薄暗くなりつつある藍色の空に月よりかは大きな球体が、青白い光を発光しているのを見たのである。ほわ、ほわ、と浮かんでいるその球体にいるのは占い師の老婆その人。彼女が藍色の空に球体に包まれた状態で現れたことから、広場などの妊婦たちは周囲と何事か喋り合い（たまたま隣になった妊婦と天に指差し合ったりするわけである）、騒々しくなったということ。

青白い光に包まれているのは今回の招集をかけた張本人である占い師の老婆その人で間違いは無いのだが、彼女はほわ、ほわ、と藍

色の空を漂うばかりで何事も喋らない。瘴気漂う外世界を祈祷術や魔法に守られながらとは言え、長い距離をひたすらに進んできた妊婦たちからすれば、
事情も説明されず、ほわ、ほわ、とされるのは苛立つ行為である。やがて彼女たちは苛立ちに身を任せて非難を轟々と燃やした。死ね、ごみ、くそ、かす、と遠回しに叫んだのである。
だが占い師の老婆は、やはり、ほわ、ほわと浮かび、何かを探すようにして妊婦全体を眺め、点高いトコロから、彼女たちを見下ろしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6816z/

歪

2011年12月28日05時46分発行